



『300 人の集落が終の棲家に集落全体がデイサービス』

すべてのヒトが必要とされる場所づくり。。。集落全体がデイサービス施設・支えあう場所を創る

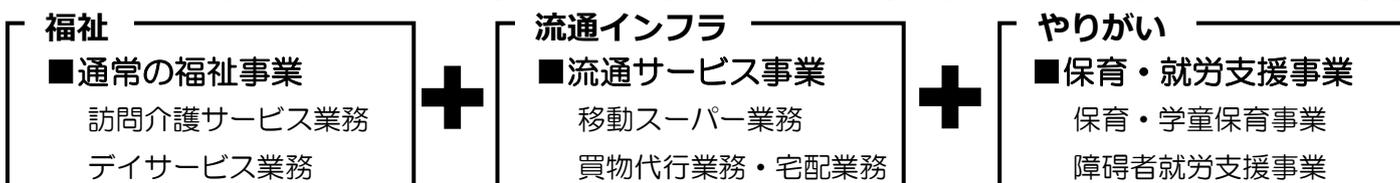
私たちの解決したい課題と将来

昭和の日本は、地域行事がたくさん。家族はみんな同じ屋根の下で暮らし、各世帯のつながりも強固だった。しかし、現在の日本では、少子高齢化や、都市一極集中による核家族化により、いわゆる「田舎」に高齢者が置いてきぼりにされ、地域独自の文化や魅力は希薄している。そんな田舎の活性化ためには、昔のような人間どうし、集落全体で支えあう環境を整備が必要と考える。

仮説①：昭和の日本の田舎には全世代が必要とされ役割を担う社会があった

仮説②：集落全体がデイサービス施設と考え役割をもち、支えあう集落は幸せ

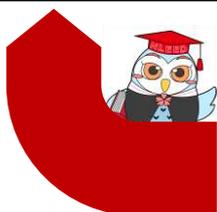
少子高齢化や核家族化に伴う地方の過疎化、それに対応し地域生活が困難になる住民たち。買物に行く手段や病院に行く手段、地域の見守りや普段の生活の不便などに対応する業種の枠にとらわれない地域生活インフラとしてのデイサービス事業。



集落を崩壊から守るために必要なこと。それは、住民どうしの繋がりの意識ではないだろうか。誰かが一方的にサービスを提供、あるいは、受け取るのではなく、住民全員が、各自の役割に応じたサービスを担い、みんなが、受け取れる社会作りをする。

利用者として

移動販売車による、各世帯の見守りと荷物の宅配。商品の受け渡し時や、健康チェック時の何気ない会話で荷物だけではなく、人のぬくもりを提供する。移動販売であれば、遠出の心配なく近場で買い物ができる。自治会バスでの通院や買い物レクリエーションなど、デイサービス業務のみならずあらゆるものに対応する。



本企画では、集落全体をデイサービス施設と考え、住民全員がサービスの利用者であり、提供者である社会の構築を目指す。できる人がサービスの担い手になる。誰かが一方的にサービスを提供、あるいは、受け取るのではなく、住民全員が、各自のできることに応じたサービスを担い、提供者となる。

提供者として

『にぎわい』と『やりがい』

「誰かから必要とされる」という意識は人間が生きていく上でかせない。そこで、年齢や障害・病気の有無を問わず、地域社会に貢献出来る集落を作る。高齢者は小さい子の子守を行い一緒に遊ぶ。自分の役割を発見し、生き生きとした生活を送ることが出来る。また、障害者は、高齢者等のアドバイスによって農作物を生産する事で自分の役割を発見できる。